

読書の四季

『忘れ数学者の記』

数学科教諭 井上 裕功

数学者という頭と頭の固い理屈屋で世俗からかけ離れた存在と思われがちだが、そのイメージを払拭してくれると期待する一冊を紹介する。本書の著者である故小平邦彦氏は数学界のノーベル賞と言われるフィールズ賞を日本人として初めて受賞した、二〇世紀を代表する数学者である。本書は小平氏の米国留学時代のエッセイや、現代の数学教育に対する提言を収めた一冊である。大数学者でありながら、著者自身の人柄の良さが垣間見えて、だからこそ伝わってくるものがある。本書は読者の年齢や文理を問わず、様々な読み方ができるので、ここでは高等科生の視点から、そして高等科の教員としてスタートを切った私自身の視点から、それぞれ

れ読み解きたい。

一つ目に高等科生の視点から、著者の活動からはグローバルに活躍するための心構えが読み取れる。今でこそ海外留学は当たり前となったが、著者が米国プリンストン高等研究所に招聘されたのは一九四八年、戦後混乱期と呼ばれる時代である。プリンストンに留学した当時の著者の手紙からは、英語が話せずに悪戦苦闘し、同じく留学していた日本人の学者達と議論し、とにかくよくセミナーを開催し、といった日常が見えてくる。家族に送った書簡では日常生活について述べながらも、実際頭の中は常に数学でいっぱい、英語が通じない代わりに研究内容で他の学者達とコミュニケーションをとる、そういった毎日だったのだろう。その中で、著者は次のような言葉を残している。

学習院高等科
図書委員会会報
No.107発行
2013.7.20

『こちらへ来てみて、こちらの
大先生方は物凄く偉いけれども、
「その他大勢」に比べると僕も決して負けないことを発見しました。』

異国の地で多種多様な人間と接し、自信を失ってしまいたいような環境の中で、このような心持ちであったからこそ、自身の研究を着実にアピールし、他者の理解を得られたのだろう。自らの長所を認識し、落ち着きと自信をしっかりと持って臨むこと、これが世界へ出るための第一歩であることは、現代においても変わらない。

二つ目に数学教員としての私の視点から、本書は数学教育に対する一つのヒントを与えてくれている。著者は「数学理解は論理的というよりは感覚的なものである」とするユニークな数字観を持ち、この数学理解の感覚を、視覚などの純粋な感覚と同類の「数

覚」と名づけている。数覚を養うには、初等教育の段階でたくさん計算をして数に親しむことが重要であり、また受験数学のような解法パターンを覚えることでは身につかないとしている。生徒から常々聞かれる質問「どうすれば数学ができるようになりますか？ どう勉強すればいいですか？」残念ながら私はこれらの質問に対する正しい回答をまだ持ち合わせていない。疑問を投げかけた生徒は、もしかしたら数覚が目覚めていないだけかもしれない。では数覚に目覚めるために高等教育の現場では何をすべきか、著者が残した課題として受け止めて、今後の教員生活に臨みたいと考える。

最後に、著者は自らを「ナマケモノの生活を理想とする怠けもの」と称しているが、外からは例えそのように見えても、その裏で並々ならぬ努力があったことは想像に難くない。私自身も怠けものの部類に入るが、著者のような「謙虚な怠けもの」でありたいものである。



書評

『坊ちゃん』

夏目 漱石著／新潮社出版

中等科 913.6/N58

一年 熊木 蒼

これは、生徒と先生の不真面目な態度や、利己的な生きがい、異を唱え、何が正義で、偽善で、そして悪であるのかを示していく、愛媛に赴任した数学の教師、無鉄砲な「坊ちゃん」の物語である。

……とは書きたくない。

なぜなら、それだけがこの物語のテーマではない、と思ったからだ。もっと、他にも夏目漱石が読者に伝えたかった本質があるに違いない。少なくとも、この物語を読んだ自分はその思った。

減ることはなく、むしろ世界中で増えていく負の気持ち。僕は大嫌いだ。

何事にも感動することがなく、「どうでもいい」「関係ない」「いいじゃん、べつに」などの一言で物事が進行していつてしまうことが自分は悲しい。

さて、この物語に登場する下女の清。もうおばあさんといつても良い年の彼女なのだが、彼女こそが、「坊ちゃん」に多大な影響を与えているのだろうか。

どこまでも「坊ちゃん」思いで、彼のことをやさしく包んでくれていて、最期の最期まで彼を思い続けた。その心意気に彼はどのような感情で返事をしていくのだろうか。

この物語の本質は、正義を思つて他人に卵をぶつけていく青年の闘争記では無く、妙な因縁をつけられ、職を離れ飛び出していつてしまう数学教師の業務日記でもない。負との対決などでは決してなく、本当に人のことを思える心とは何か、それを考えさせる、いわば一種の問題提起がこの話の本質ではないか。

近代文学の中でも、この本は誰にでもわかるような言葉の使い方をしている、今でも新鮮味を帯びている。

皆さんもぜひ、読んでみてはいかがだろうか。面白さを保証することはできないが、この本に流れる温かさ

は十分に感じ取ってもらえる……と思う。

『イモムシハンドブック』

安田 守著／文一総合出版

中等科 486/Y62

一年 當間 新司

イモムシは一般的にはそれほど好まれないかもしれない——現実には日本には鱗翅目が約六千種も生息しているのです。この本は、そんなさまざまなイモムシたちを生き生きとした写真と詳しい説明によって、私たちの生活にイモムシという名の彩を加えてくれることでしよう。

これから、そんなイモムシたちの美しさ、かわいさを少しでも伝えるべく、紹介していきます。

はじめは、もともと身近なモンシロチョウです。体長は五齢幼虫が三センチほどの、主に畑の作物やアブラナ科植物によく見られる薄緑で側面に黄色い点が入っている幼虫です。

しかし、スジグロシロチョウという蝶の幼虫もこれによく似

ているのです。さて、こういう時はどうしましょうか。困ります、困りますよね。そんな時に『イモムシハンドブック』を読めば「ちよつとこつちは大きいじゃないか！」とか「毛の色が濃いじゃないか！」ということがわかるんです。ハハッ

続いては、幼虫と成虫のギャップの激しいやつ写真のあるページを紹介します。

①ウラギンシジミ (P24)

②アサギマダラ (P44)

③シャチホコガ (P80)

④クジャクチョウ (P34)

などなど

みなさんに少しでもイモムシの良さが伝わったところでクイズです！

Qこの中で実際には鱗翅目に含まれていないイモムシはどれでしょう♥

①サトイモセセリ

②カラスアゲハ

③オオムギワカバ

④ニトベミノガ

最後に、この本は読んでも、見ても非常に楽しいので是非手に取っていただきたいと思いません。